

NO. 31 1998. 1
 (株)九州地域計画研究所

謹賀新年

新年おめでとうございます。

昨年は事務所の体制も一部変わりました。今後も若い所員ともども何かと声をかけていただけるような事務所づくりに励んでいきたいと思っています。

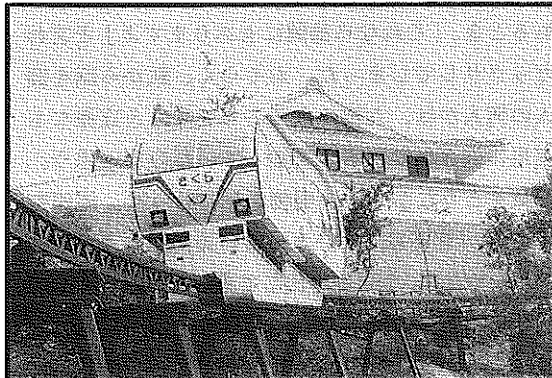
これからは経済成長の伸びも大きくは期待できない時代が続くようですので、ますます低価格・高品質の商品づくりや街づくりが大切になってくると思います。

今後ともお引き立ての程よろしく申し上げます。

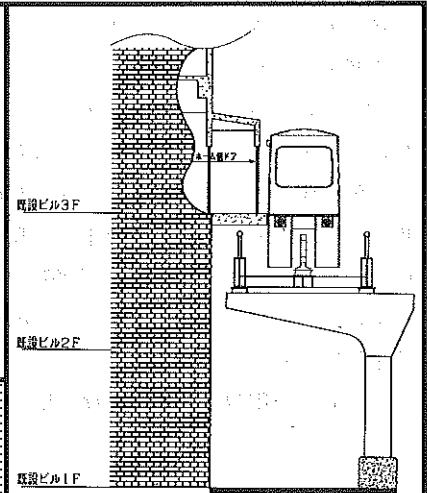
平成10年1月1日

(株)九州地域計画研究所 所員一同

目次は2ページにあります。



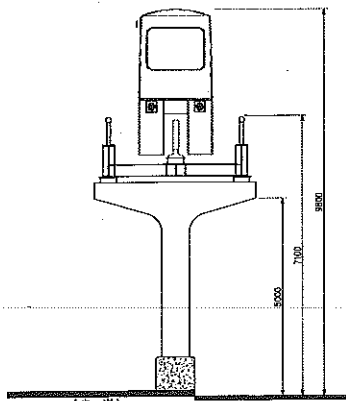
福岡県添田町添田公園、
 18人乗り、レール長181m、
 速度60m/分、
 最大傾斜17度



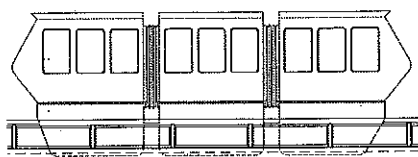
ビルに付設する駅

ゴルフ場、14人乗り、レール長653.5m、
 速度300m/分、最大傾斜5.6度

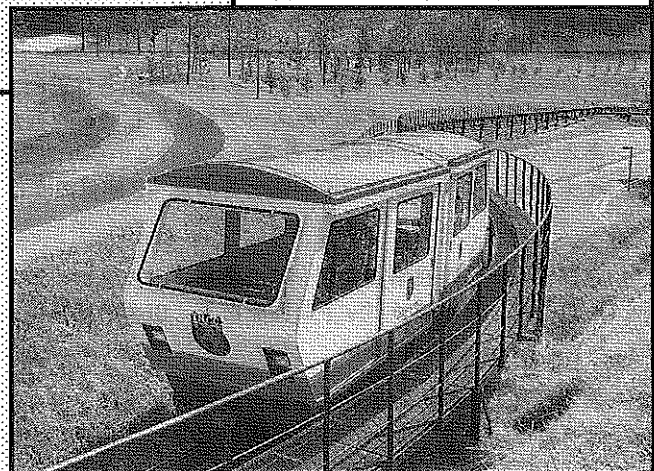
●ミニモノレールの写真と
 設計図 (関連記事2頁)



標準断面



標準側面



百円玉ひとつで、街のなかを空中散歩

— ミニモノレール応援の勝手連ものがたり —

〈お猿のカゴヤに出会うまで〉

十年ぐらい前のことだったと思うが、朝の6時台のNHKテレビで、ミニモノレールの用途が広がって、人も乗せられるようになったことを報じていた。そのとき「これはいけるかもしれん」と直感のようなものが走った。早速メモしておいて、NHK松山だったか愛媛だったかに電話して、製造している会社名を聞いた。そして電話でお願いしてパンフレットを送ってもらった。それを見て、再度電話して「建設費は何億くらいかかるのでしょうか」と尋ねたところ、えらくとまどっている様子だった。

聞いていくうちに分かったのだが、このモノレールは、もともとミカン山用のものだったのである。ミカン不況の煽りを受けて売れなくなったので、ゴルフ場用に改造したりして用途開発中で、私がテレビで見たのはその場面であった。私が「何億？」などと聞いたので、びっくりされたのである。その時、聞いたのは何千万円ぐらいの話であった。もともとミカンからスタートした、肥料やミカンの輸送用であるから、何千

万円などという仕事はなかったのだろうと思う。

無知というものは素直で横暴なものである。その典型のような私は、「それでは、10倍ぐらい、例えばキロ5億ぐらい出したらどんなもんが出来ますか」などといった質問をするものだから、ひょっとして、からかっているのではないかとでも思ったのか、連絡もうまくとれなくなった。

しかし私の方は意気軒昂で、聞いてくれそうな人には誰かれなしに話していった。

とあるとき、「それなら福岡にもありますよ」と言われてガックリしてしまった。おそらく、私から話を聞いた人の何人かは、九州のあちこちでもっと立派なものが実用に供されているのを知っていたのだと思う。

私は気をとりなおして、実物を見に行った。添田町の山の上の、「岩石城」という町営の美術館へ上がるスロープカーである。130円を出して乗ってみた。そして製造会社名をメモして来て、電話番号を調べて電話してみた。それが筑穂町の嘉穂製作所である。そしてカタログを送ってもらった。私はいよいよ「これはいけ

NETWORK

百円玉ひとつで、街のなかを空中散歩

— ミニモノレール応援の勝手連ものがたり 2

田園に住むライフスタイルを考える～第4回よかネットセミナー 5

高齢者のための共同ホームを考える～第5回よかネットセミナー 6

見・聞・食

ごみ問題を考える③ 福岡県のごみの取り組みは、出す前と出した後の2本柱 8

地域ゼミ52報告「日本一のスープを目指して」一番食品㈱ 10

あと20年後には五百羅漢になるかもしれない～小城町の平成五百羅漢の取り組み 10

イギリス旧産炭地振興のその後とその他～2回目のグランドワークトラスト視察 12

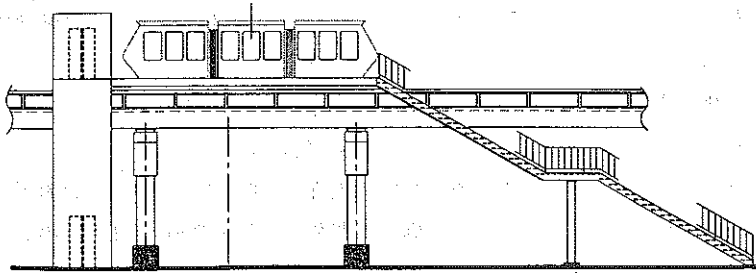
近 況

才田地区炭住改良事業完成～町内会長さんの喜びの声に感激 13

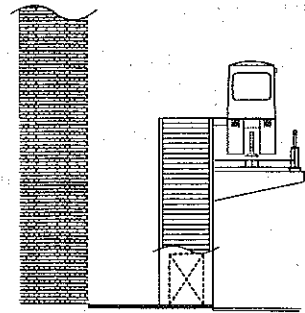
所員近況 日本のロボットの性能低下／田舎の神社に出現した夜のサロン／若返り法発見 14

本・BOOKS

最も平凡で、最も常識的で、最も具体的な雑誌を創っていた、
 非凡でユニークな“人”の仕事場のはなし「花森安治の編集室」 16



高架橋上駅



る」と思い、一層吹聴して回った。その網にひっかかったのが長兄飯沼和正さんであった。それ以来、何かついでがあると「あのお猿のカゴヤはどうなっていますか」と聞かれる羽目におちいつている。

〈モノレールは、実用的交通手段にならないのか〉

私は常々、「立派な」ものよりも「いいかげんな」ものを好んでいる。「立派」という言葉は、「新明解」によると、「特に劣っているところが見あたらないほど、内容の外観が充実している様子」とされている。これはどちらかという、あらゆる点で必要かつ十分を超えるぐらいの状態になっていることである。一方、「いいかげん」は加減がいいことで、料理の塩梅の加減がいいということである。つまり過不足のない状態を言っている。

モノレールの不幸は、立派を目指した人々によって開発が始まったことに起因していると思う。そのことを感じたのは、神戸のモノレールが無人運転を目指していることを聞いたときである。聞くところによると、無人運転にするために、かなり多くの追加投資・設備が必要になるということだった。人件費を減らすことばかり考えているうちに、追加された投資部分の金利や減価償却が、人件費をはるかに超えてしまうことが起こりうる。

本来、モノレールは中量・中速輸送機関のはずであった。それならば、時速何十キロというスピードはいらない。もし仮に、市街地に導入するならば、バスの安定した営業運行スピードである10~15キロを目指せばよい。バスは道路混雑によって遅れることがあるが、モノレールだと定時性を確保することができる。

〈安いものを高く買うという行き方〉

高いものを安く買うのと、安いものを高く買うのと、どちらが良いと思うかを尋ねると、大抵の人は前者だと答える。しかし私は、ケチなので後者をとることに

している。後者の方が、はるかに安くて良いものが得られ、豊かな気分が味わえるからである。

例えば、2万円のビフテキを半分に値切って1万円で食べても、結局1万円の支出となる。一方、100円の豆腐をやめて、200円の豆腐を買うならば、縄で括って帰れるようなものが買える（福岡での話）。たった200円で、あの豆とにがりの入り交じった香りや舌触りが味わえる。「並より上だぞ」と優越感にひたりながら、値切ったビフテキ代1回分で、50回もいい気分になれる。

安いモノレールをテレビで見て、「これはいけるかもしれない」と直感したのも、キロ70~100億円という高いモノレールを値切っていっても、とてもじゃないがキロ10~20億円ということにはならないと思ったからである。

ビフテキではなく、いい塩梅加減の豆腐料理のようなモノレールの方が、市街地の市民の足には合っていると考えている。

〈お猿のカゴ屋を、本当に役立つモノレールにすることができるのか〉

添田町で乗ってみて、嘉徳製作所を見つけて、カタログを送ってもらった後で、一度だけ営業部長が当事務所へ見えた。例によって、私はユメを語り出し、「キロ10億か20億出せばどんなものができますか」などとたずねた。私は豆腐レベルの話をしているつもりだったが、部長さんから見れば、超零細企業である上に、とてもモノレールを買いそうでない会社のヤツが大言壮語をはく……といった状況だったに違いない。またもや、あまり連絡はなくなってしまった。その間にも、「人にやさしいまちづくり事業」などでの提案には入れていたのだが、当方にはモノレールというハードの製造や改造の能力はなく、パンチがきかなかつた。

片思いがやっと認められだしたのは、この春頃からである。9月には社長さんから「岐阜からコンペへの参

NETWORK

加要請が来たのですが、手伝ってくれないか」という電話がかかって来た。私どもの事務所で、嘉穂製作所の技術陣や社長さんも集まってコンペ内容をまとめた。キロ20億円以下の建設費で、百円玉2個で利用できるということであるから、十分実用的であるし、注目されると思っている。もし、インフラ部分（高架とレール部分）が、一般のモノレールのように補助対象になるならば百円玉1個で利用できる。

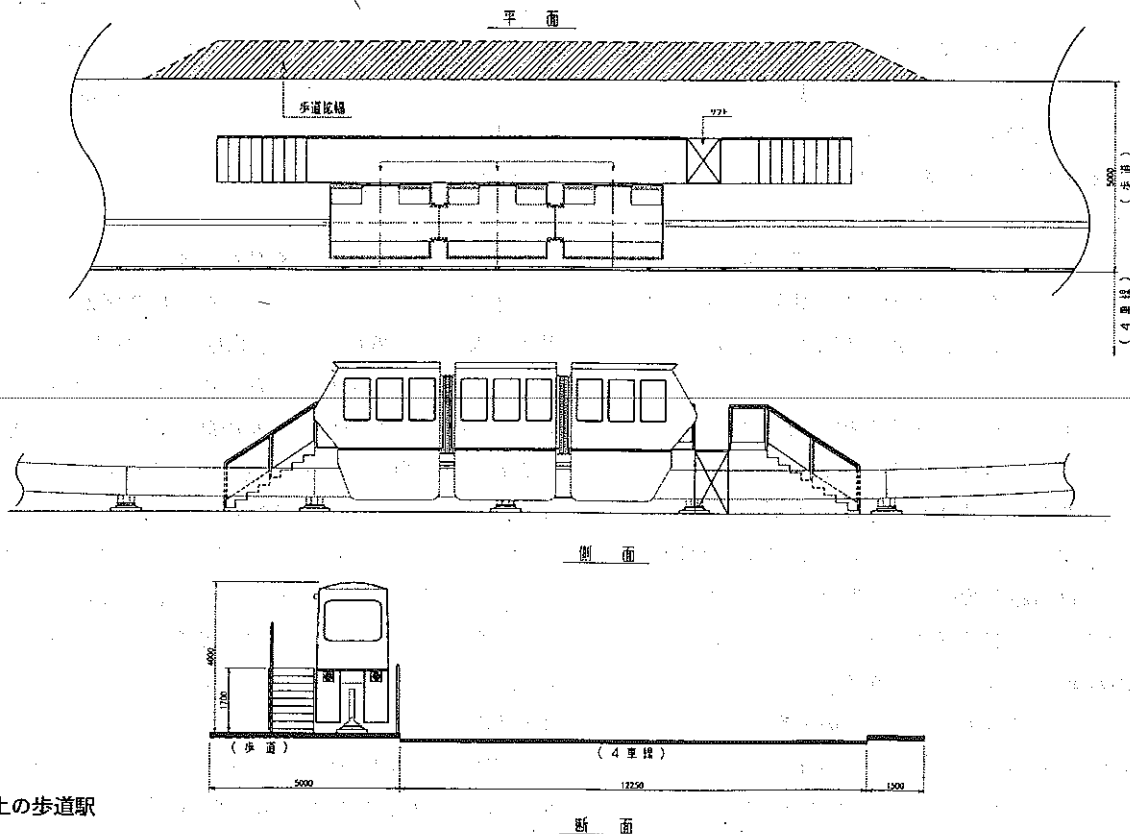
以下に提案概要と仕様図を示しておく。

- ・路線 ループ方式と、一本の高架の上に2本のモノレールをつけて、車輛を横へ移動させて（トラバース方式）往復運転を続ける方式がある。
- ・駅計画 上下やカーブについて柔軟性があるので、地上まで下って来て乗客の乗降をすることや、横へ曲がってビルの中へ入って行って乗降するなどの方法もとれる。
- ・安全性 三重のブレーキシステムとなっている。速度監視はラックとギヤの噛み合いによる方式である。スリップは起こらない。
- ・速度 勾配によって違いますが、最高20キロ/時ぐらいで、営業運行速度は10~15キロ/時ぐらいである。

いである。

- ・車輛 今考えているものは、20人乗り3輻連結ぐらいである。
 - ・建設費 軌道・車輛・その他設備を含めて一応キロ当たり15億円ぐらい。
 - ・年間運行経費 人件費・保全費・電力費・諸経費・減価償却費及び金利を含めて、1キロのもので大体2億円程度である。そのうち半分が減価償却費となっている。
 - ・収支 上に述べたように、1回200円ぐらいかかるが、インフラを補助対象にしていざけると1回100円ぐらいになる。乗客数が問題だが、それならば仮に150円とすれば成り立つのではないかと考えている。
- 注) 乗客数はピーク5時間は乗車率40%、その他の時間は20%とみている。なお、運転間隔はピークが5分ピッチ、その他の時間が10分間隔である。

追記) 嘉穂製作所は、筑豊炭鉱地区で仕事をしてきた日鉄系の地場産業です。私どもも、地域のためにもなると思って、上記以外にも、方々に企画提案をしています。 (糸乗 貞喜)



地上の歩道駅

田園に住むライフスタイルを考える

～第4回よかネットセミナー～

最近、田園や自然へ回帰する田舎暮らしへの願望が高まりをみせています。これからは都市と農村との新たな関係づくりを模索し、共生していく時期に来ています。第4回セミナー（11月21日）は、阿蘇で田園リゾート事業に取り組んでおられる佐藤誠教授（熊本大学教育学部）を迎え、その活動やヨーロッパの事例を通して「新田園都市づくり」についてお話していただきました。

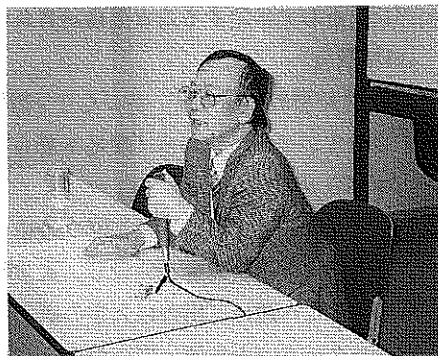
●欧米では逆都市化*の時代の到来

- 80年代後半から米国の農村社会学のテキストでは、大都市圏から郊外への人口移動が顕著であるという記録が書かれ始めた。1980年代前半から高速情報、交通ネットワークの整備に伴って、高所得、高学歴の人たちが田園暮らしを楽しみながら高度、知的で高収入を得られる仕事をするという「テレワーカー」が増え、今まで農業者が大半を占めていた農村社会は随分変容している。
- 80年代の後半にはイギリスでもこの様な現象が見られた。
- 彼らは、古い農家の納屋や、石造りの農家、カントリーハウスの復元を行うなど、農家を含めた住宅のストックの活用が見られた。
- 英国では、これまで上流階級の人たちが、田園暮らしを自ら選んで、牧場などで優雅な田園居住を楽しんでいたが、この動きが中流階級まで浸透している。これは日本でも同様に起こりうるのではないかと思われる。そのためには快適な田園居住の整備が必要になってくる。

●リゾートで求められるものとは

- 欧米で最も「旅行好き」といわれるドイツでの「今年の流行の旅先」についてのアンケートでは、1位がイタリアのトスカーナ、2位に南仏のプロバンス、3位にエーゲ海の小島という結果が出た。1位、2位に関してはブドウ畑、牧草地、麦畑だけの緑の空間であるが、それが旅慣れたドイツ人の人気であるようだ。
- 九州においても、運輸局が観光客4000名に対して行ったアンケート結果によると（2000名回答）、もう

佐藤 誠
熊本大学
教育学部教授



一度九州に来るとしたらどこに行きたいですか、という問いに対して得られた回答は、圧倒的に離島が多かった。壱岐、対馬、五島列島、屋久島等はドイツ人の人気旅行先のエーゲ海の小島と似たところがあるのではないかと。自然以外に何もなく、ただ時間だけがゆっくりと進んでいくところが今後のリゾートを考える上で参考になりそうだ。

●リゾート開発の3つの模索

日本では、従来の大規模な開発方式によって、地価上昇を誘発させ、利潤を得ることは難しくなっている。建設省では地価上昇による利潤を前提としない開発として、グリーンツーリズムを施策として据えようということになった。

基本的には手作りによって行われる3つの方式がある。

①コーポラティブハウジング方式の田園版（静岡県沼津市）

沼津の農業者と一緒に計画を練り、エンドユーザーが出資をし、地元の人と土地利用について議論をして、資金を確保し、エンドユーザーのリスクと負担において開発をするという方式である。

②グリーンストック方式（阿蘇）

700haの水田、集落、山、原野の一つの地区を対象とし、湿原と森林のトラスト事業、「農地トラスト」の提案、環境教育等のプロジェクトがある。

〈「農地トラスト」の提案〉

- ・ネオ・ルーラリズムの受け皿として、耕作放棄地の棚田や山に戻りつつある開拓畑地などを健康水田やホビー果樹園などとして、都市のニュー・ファーマーも農地・森林の保全と活用に参加してもらい、「農地トラスト」を新しいライフスタイルの提案として事業化する方向で進めている。農地利用権を付けたコテージを「滞在型クラインガルテ

ン」として供給することも検討されている。
 〈環境教育〉

・21世紀型農林業の担い手づくりを環境教育と連結させて、子供時代から「農ある暮らし」の魅力を体感させる。

③オープンカレッジ方式（京都府 丹後）

田舎に大学の研究室を開設し、大学教員、学生が足繁くそこへ通い、田舎に大学の研究室を持ちながらインターネットを使って一つのテレワーカーを育てていこうという、マルチメディア時代のリゾート方式である。

以上のような話の後、地元でグリーンツーリズムに携わっている方、今後取り入れようとしている方などの参加者から、以下のような意見が出されました。

「都市、農村の情報量、質ともに都市からの情報に偏っている。もっと農村からの情報を増やすべきではないか。」「地域で農地の管理をするシステムを確立できないだろうか。」

農地を所有する人が高齢化しており、農をする人はいても業をする人は減少しているといわれています。耕作を放棄している農地も多いと思われます。都市に住んではいるが農業に興味がある人が、週末農業ができるシステムも今後は考えていく必要があると思ひます。
 （小田 好一）

※逆都市化

都市から農村に人口が逆流することを言う。逆都市化は、まず「中心人口はかなり現象し、郊外人口は、郊外が田園居住に似通っていることもあり微増、都市圏全体では少し減少」という段階から、「中心人口はかなり減少し、郊外人口も減少、都市圏全体では大幅減少」という、次の段階へ至る。

高齢者のための共同ホームを考える

～第5回よかネットセミナー～

前号のよかネットでご紹介した、ハーモニー協議会の代表理事花田光洋さんにお話を伺いたいと所内でも評判になり、服部メディカル研究所の服部万里子所長を同時にお迎えし、12月11日に第5回よかネットセミナーを開催しました。

〈ケア付き賃貸アパートについて－花田光洋さん〉

●住み慣れた地域で在宅ケア

・ケア付き賃貸アパートを建設しようと思ったのは、大



共同ホームについて話をしていた服部万里子さん（左）と花田光洋さん

きな病気を患い、死に対する恐怖から自分の生き方について考えるようになったのがきっかけである。

・その後病気が回復し、大きな養護施設に再就職した。その頃から施設の中の個別化や地域のオープン化ということが言われていた。努力はされていたが、共同生活の場ということことや、限られた職員での運営でもあり限界があった。また、以前より改善はされているものの、生活上での地域へのオープン化は行われていないように思っていた。

・自由に振る舞える自分の家に、施設の安全性を求ることができないかというのが、在宅を考える上での一つのテーマであった。ケアハウスや有料老人ホームはこういったことから整備されたものであるが実際には問題を抱えている。

・有料老人ホームは、入居時に終身介護料をまとめて払うが、何かあると病院に入院させられるなど施設での一生介護を受けられないこともある。ケアハウスでは、特別養護老人ホームが併設されているところが多く、要介護度が高くなるとそちらに移されているようである。

・住み慣れた地域を離れて、ケアハウスなどに入居しなくても、定期的に巡回することによって在宅でも十分にケアできる。そこで、在宅でかかる費用を軽減するために何世帯か集め、コスト的にもクリアしようとしたのがケア付賃貸アパートである。

・建物は、中古のアパートを少し改築するだけでほとんどの虚弱した高齢者に対応可能である。火事の心配についてはオール電化にしたり、線香は絶対に使わないという厳しい規則をつくっている。

●郵便ポストのあるところにケア付き賃貸アパートを
 ・ケア付き賃貸ハウスでも、重度な痴呆症と意志能力のない人、病状が極端に不安定な人は介護が難しい。そこでケア付アパートを郵便ポストがある周辺に一つずつ作り、それが10～20件ぐらい集まったとこ

ろにグループホームをつくれたらよい環境ができるのではない。同時に医療との連携を図ることが重要である。

〈グループホームについて—服部万里子さん〉

●グループリビングとグループホーム

- ・グループホームには2種類あり、精神薄弱者のグループホームと高齢者が共同で生活をしながら助け合って暮らすグループリビングある。
- ・平成8年度から高齢者グループリビング支援モデル事業で行われており、高齢者が気の合う人たちと地域で暮らしていくものに補助金を出し支援がなされている。現在認定されているのは、埼玉県にある「グループハウスさくら」一件のみである。
- ・「グループハウスさくら」の家主は、なかなかアパートを借りれないといった高齢者のために、8年前、家を立て替えるのと同時に高齢者の住まいを併設させた。65歳以上で自分の身の回りのことはできる女性を公募し、現在65歳～88歳ぐらいの6人が暮らしている。家賃は105千円（生活保護の最低金額）で、入居時に3人から権利金300万円を頂いている。食事は朝食は全員で作り、夕食は近所の方が手伝いに来て一緒に食べている。また月に2回運営についてのミーティングがある。
- ・今まで痴呆が進んだとき、一緒に暮らせるかどうかの判断を中の人間だけで行ってよいのか悩んでいたが、認定されてよかったことは、支援と同時に運営を指導する第三者が入ったということである。
- ・認定されている以外にも、全国にグループリビング

痴呆対応型老人共同生活支援事業（痴呆性老人向けグループホーム事業）の概要

定義	中程度の痴呆性老人を8人程度入居させ、小規模な生活の場で食事の支度、掃除、選択などを含め一日中共同して生活をおこなう事を目的としたサービス提供の場
制度	終の住家ではなく在宅支援のための利用施設として位置づける
定員	5～9人
主体	市町村で社会福祉法人等に委託する
対象者	中程度の痴呆性老人・・・徘徊等がある ¹⁾ 医学的な痴呆の程度は問わず、ADLは独立歩行が可能な程度（ランクJ～A（B1））共同生活が可能なもの
サービス	家庭的な雰囲気でのケアスタッフとともに食事、洗濯、掃除などの共同生活をする。健康管理の指導や緊急時の対応が必要。
職員	日中は入所者3：1 宿直専門員あり
負担	コストの1割負担+家賃、食費と水道光熱費等の実費は人数割負担
課題	在宅介護支援センターがフォローし、病院や老人施設がバックアップする。家族会やボランティアと連携をする。
建物	・居室は原則個室 ・便所、洗面所、浴室及び居間、食堂などの交流場所があること ・備品はテーブル、イス、テレビなど

がいくつかあるが、神奈川県にある「グラニュー」「グラニー」は、民間の老人下宿屋で、空いた企業の寮を丸ごと借りたり、買い上げて改装し、現在5棟を運営している。介護については別に会社をつくらせている。

- ・この特徴として、①運営に関して第三者の機関を入れているので入居者が相談できる場がある、②1つ1つは小さい（10人程度）が、地域に5棟あるので食事を一ヶ所で作って配達するといったようなスケールメリットが活かせる、③ケアに関してできることとできないことを明確にしているのでトラブルがない、などがある。

●痴呆性高齢者の共同生活（グループホーム）

- ・現在、公的保険の在宅サービスのひとつに位置づけられ、関心を集めているのは「痴呆症対応型老人共同生活」である。
- ・現在認定されているグループホームは、全国に10ヶ所ある。平成8年のモデル事業で実施された石川県グループホーム「いろり」は、痴呆専用の老人保健施設に併設されている。老人保健施設で元気になった高齢者の受け皿をつくるため、看護婦の寮だった古い戸建ての空き家を活用しグループホームをつくらせている。
- ・一人では暮らせないが、何人か集まってちょっとしたサポートがあれば暮らせるという高齢者が多い。また高齢化が進み、ますますこういったグループホームの需要は増えてくだろう。しかし、痴呆性の老人を集める制度だけでなく、子供から痴呆性でない高齢者、痴呆高齢者などが集まったものにも魅力がある。ただし、民間でつくる場合は、運営のできる財源やシステムをつくらせておくことが必要である。

お二人の話の後、会場では様々な意見や質問が飛び交い、中には自分が高齢者になった時は花田さんのケア付き賃貸アパートに入りたいという申し出もあり、身近な問題として深刻に捉えられているのだなと実感しました。

今後も、ますます需要が高くなると思われる高齢者の共同ホームの取り組みについて、所内でも議論していきたいと思っています。（七搦 かおり）

ごみ問題を考える③

福岡県下のごみの取り組みは、
出す前と出した後の2本柱

地域ゼミで9月より「ごみ問題」を取り上げて、3回が終わり、1月には4回目を予定しています。当初は「そんなニーズは無いのではないか」、「話が盛り上がらないのでは」という不安や疑問がありましたが、いざやってみると、講師の方の1時間程度の話の後の質疑応答が多く、「ちょっといいですか」とみなさんが手を挙げる状況であり、大変密度の濃い会となっています。

また、直接的にごみ処理等に関係しておられる方から、私のような、自分のごみが中心の者まで、様々なレベルの人がごみと向かう状況にあるこのような会が良いのかな（？）と、考えたりもしています。

今回は、地域ゼミで取り上げた「ごみ問題」シリーズの第2回「福岡県の一廃・産廃の状況」角敬之（福岡県環境整備局廃棄物対策課）、第3回「最新のごみ処理施設について～固形燃料化（RDF）、溶融化」香ノ木賢（㈱荏原製作所環境システム事業部）、林照男（新日本製鐵㈱環境・水道・プラント営業グループ）について報告したいと思います。

●福岡県のごみの減量処理率、リサイクル率は増加
平成7年度の福岡県のごみの排出量は5,499t/日、一人当たりになおすと、1,122g/日で、ほぼ全国並の値

項目	単位	全国	福岡県
ごみ総排出量	万t	5,030	194
一人1日当たりの排出量	g	1,103	1,094
ごみの減量処理率	%	85.6	93.3
ごみの直接焼却率	%	74.3	81.8
資源化等の中間処理率	%	11.3	11.5
リサイクル率	%	8.0	7.6
直接埋立率	%	14.4	6.7
残余容量	万㎡	14,931	733
残余年数	年	8.1	8.1
廃棄物処理事業経費	億円	27,404	885
一人当たりのごみ処理経費円/人年		18,300	13,900
一人当たりのし尿処理経費円/人年		6,500	4,400

福岡県と全国の比較（平成5年度）
（出典：厚生省生活衛生局水道環境整備課資料）

となっています。また、ごみの減量処理率、リサイクル率はここ数年増加傾向にあり、昨年（平成9年）4月の容器包装リサイクル法の施行により、ごみの減量化の期待は高まっています。

最終処分場の残余容量をみると、平成5年度の段階で、福岡県が733万㎡（全国の約5%）で、残余年数が約8.1年となっており、厳しい状況にあります。また、残余容量は市町村において格差が大きく、福岡県の場合、この数値が0のところもあれば、「捨てる場所はその辺に沢山ある」と言えるようなところもあります。

●減量はRDFとリサイクルで

一般廃棄物は各市町村で解決することとなっていますが、ダイオキシンや最終処分場の問題もあり、既存の施設での処理や、新規処理場建設が難しい状況にあります。現在行われている解決策として、広域化によ

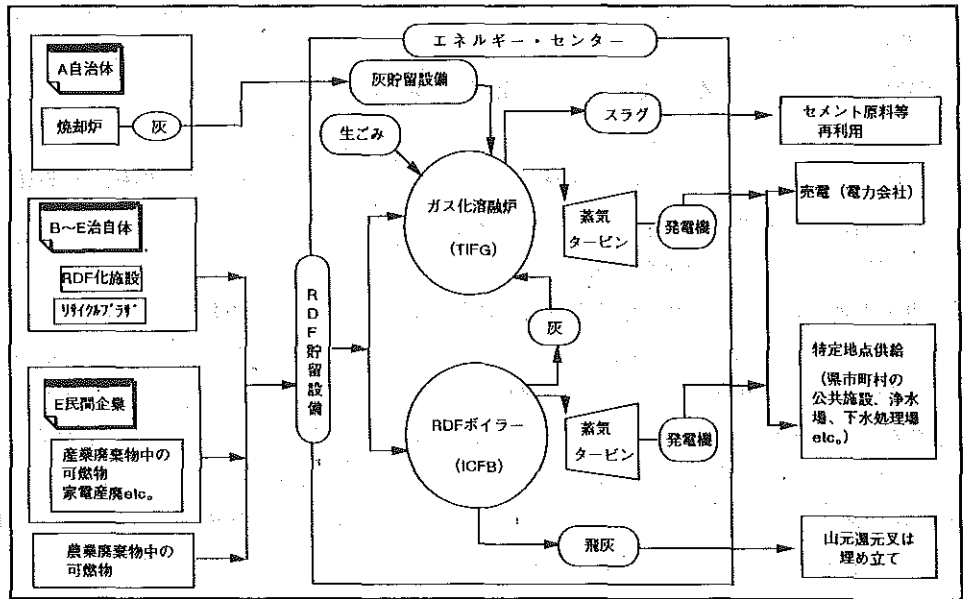
区分	3年度		4年度		5年度		6年度		7年度		
処理計画区域人口	千人		千人		千人		千人		千人		
1人1日当たり排出量	4,809		4,833		4,856		4,879		4,902		
1人1日当たり排出量	1,150g		1,091g		1,094g		1,099g		1,122g		
ごみの総排出量	t/日	100%	t/日	100%	t/日	100%	t/日	100%	t/日	100%	
	5,532		5,275		5,314		5,360		5,499		
計画処理量	①直接焼却	4,270	77.2 (78.1)	4,269	80.9 (81.6)	4,313	81.2 (81.8)	4,369	81.5 (82.2)	4,536	82.5 (83.2)
	②直接埋立	643	11.6 (11.7)	411	7.8 (7.9)	353	6.6 (6.7)	221	4.1 (4.2)	194	3.5 (3.6)
	③高速たい肥化	1	0.0 (0.0)	2	0.0 (0.0)	2	0.0 (0.0)	2	0.0 (0.0)	2	0.0 (0.0)
	④焼却以外の中間処理	556	10.1 (10.2)	549	10.4 (10.5)	604	11.4 (11.5)	721	13.5 (13.6)	720	13.1 (13.2)
	計	5,470	98.9 (100)	5,230	99.1 (100)	5,272	99.2 (100)	5,313	99.1 (100)	5,452	99.1 (100)
自家処理量	62	1.1	45	0.9	42	0.8	47	0.9	47	0.9	
ごみ減量処理率 % = $\frac{①+③+④}{⑤}$		88.2		92.1		93.3		95.8		96.4	

平成3～7年度の福岡県の状況
（出典：福岡県資料）

※（ ）は計画処理量の内訳処分率

※平成3年度のごみの量は、台風17号、19号の災害ごみが含まれている。

溶融炉とRDFを活用したごみ処理システムの流れ
(資料提供：株式会社荏原製作所)



る大型の施設建設、固形燃料化 (RDF) により埋立量を減らす、ごみを溶かして (溶融化) 最終処分場へ送る量 (埋立量) を減らす (RDF、溶融共に、最終処分場の残余年数を延ばすことになります)、そして、リサイクルにより、焼却や埋立量を減らすなどが考えられます。

福岡県下では、RDFとリサイクルの2本柱を進めようとしているようです。

●可燃ゴミを燃料として活用 (RDF)

現在の日本では、可燃ゴミは焼却することによって処理されていますが、これを、破碎と乾燥を繰り返すことで最終的に固形の燃料として、再利用しようというのがRDFです。

- ・ CO2の削減効果が高い
 - ・ 処分場と離れた場所での熱利用が可能
 - ・ 公共施設での小規模分散使用が可能
 - ・ 固形燃料化不適物があるため、若干量の処理・処分が必要
- などの特徴があります。

さらに、RDFを活用する企業を確保できるかが問題となりますが、福岡県の場合、このような企業の確保が既に出てきているとのこと。

●どんなごみでも1つの炉で処理 (溶融システム)

高温の炉の中で、可燃ごみ、不燃ごみ、汚泥など、どのようなごみも一緒に処理してしまい、最終処分場の埋立物がほとんど出てこないという仕組みが溶融シ

ステムです。

- ・ どんなごみも処理できる
- ・ 大量のごみを必要するため、広域処理に適している
- ・ 最終処分場の埋立ごみを溶融することで、処分場の再生を行うこともできる

などの特徴があります。

また、溶融物は建設用コンクリートやインターロッキングブロックとして市場流通されているようです。

福岡県内では、飯塚市に平成10年、糸島地区に平成12年を目処に建設が予定されています。

●おわりに

処理施設については、様々な技術開発が行われていますが、いずれもごみがゼロに近くはなりません。ゼロになるということはありません。加えて、まだまだコスト面での問題もあり難しい状況です。

また、広域処理においても、施設を建設することだけでは解決されない問題があるようです。

次回 (1月中旬予定) の地域ゼミ (ごみシリーズ) では、長年、県内のごみ問題の取材をされている新聞社の方に来ていただき、地域のごみ問題の現状について考えてみたいと思います。

(澤谷 真紀子)

地域ゼミ 52 報告

「日本一のスープを目指して」一番食品(株)

今回の地域ゼミ(12月9日)は、昭和34年の創業以来「味の仕掛人」「黒子役」をモットーに、麺類のスープから始まり、今や8,000種類の商品生産を行っている「一番食品(株)」の宮房英幸氏(常務取締役)に話をさせていただきましたので紹介します。

一番食品は、福岡県飯塚市にある食品製造の会社で、即席麺をはじめとした様々なスープやだしを製造している会社です。昭和34年に飯塚市に設立された「徳一食品研究所」というのが当時の名称だそうです。(余談ですが、徳一の徳というのは、飯塚市の徳前(とくぜん)からとったものだそうで、実は拙者の出生地と同じ町で、びっくりしました。)徳一の一は、一番になるという創業者有吉社長の意気込みを表したもので、現在の社名に通じています。また、オンリーワンの企業を目指して、今も飯塚市で操業されていますが、当時は今で言う「ベンチャー企業」そのものだったそうです。

経営理念は、「医食同源」「旨くて・安い」「安全な」そしてその地域にマッチしたおいしい味創りを通じ心身の健康を図り、たのしく心豊かな食文化の向上、生活文化の向上に寄与することであり、毎日が研究開発の連続ということでした。そのため、全社員の10%相当が研究に携わっておられ、営業マンは移動研究員として全国各地の「味」の情報収集に駆けめぐっているとのことでした。

冒頭に書いた8,000種類の商品のバックには、30年以上にわたって蓄積された「味」のデータベースがあり、現在生産されているアイテムの2倍以上の「味」のデータベースがあるそうです。しかも毎日5~600種類の商品が生産されており、毎日3件以上の「味」の相談があるそうです。いろんな地域の味はあっても結局は、「おふくろの味」には負けるとのことでしたが、その味を追究することが目標と言われました。

飯塚市を離れないのは、一つは地域にこだわる商売であり、福岡、北九州との地理的位置、そして何よりも食品に欠かせない「水」が確保できることなどをあげられました。付け加えると、「ひよ子」「チロリアン」などのお菓子もこの飯塚で生まれ育った全国ブランド

であり、隆盛を極めた石炭時代の大きな資産であり、「味」にうるさい地域が育てた産業と言えるでしょう。

(山辺 真一)

あと20年後に五百羅漢になるかもしれない

～小城町の平成五百羅漢の取り組み

五百羅漢の石像をみると何故か穏やかな気分になるのは私だけであろうか。地方に出かけるときに五百羅漢があるところでは必ず立ち寄るようにしている。

今年のいつの日かは定かではないのであるが、ふとテレビをみていると小城羊羹で有名な佐賀県小城町で五百羅漢を復活するため、町内の有志の方が頑張っているという内容のレポートがあったのが気がかりになっていて、いつか小城町にいて平成五百羅漢なるものを見てみたいと思っていた。

今回のよかネットの取材を兼ねて五百羅漢を拝謁することができた。

●檀家がいなくなったお寺で羅漢さんが流出

五百羅漢のあるのは星巖寺というお寺であり、中心部から車で5分程でいけるとところにある。境内の前の説明書によると、「星巖寺は黄檗宗に属する小城鍋島藩主の菩提寺であり、2代藩主直能が貞享元年(1684年)に鷲山に寺院建立を思い立ち円通寺の末寺として建立を行った。……五百羅漢は江戸時代の中頃、三里西川の石工平川徳兵衛一族の作と伝えられ小城町重要文化財である。」と記されている。

そこで役場の観光課長さんに平成五百羅漢運動のいきさつや取り組みを聞いてみたところ、「明治維新になって、小城町にいた鍋島藩関係者が東京など中央に行ってしまう、檀家がいなくなってしまう。そこで寺の管理をする人がいなくなってしまう、その後御利益



現在、残っている羅漢群



点在している平成羅漢さん

があるのかどうかかわからないが五百羅漢を持っていく人が出てきたこと、それと朽ち果ててしまったものもあり、現在200体程になっているのです。」という星巖寺五百羅漢の悲しい物語を聞かせていただいた。

●平成元年「フォーラム小城」の発案により開始

平成五百羅漢の運動は、平成元年に町内の有志の方々のまちおこしグループである「フォーラム小城」の提言を受け、町や観光協会との呼びかけで平成元年から事業が始まり、これまでに約130体を奉納している。

現在は、毎年10月毎催される「ふるさと祭り」の時に、主に町内の方々に呼びかけて実施している。羅漢制作希望者には石とノミを提供し、時間制限なしで好きなように彫ってもらうとのことである。ちなみに、地元では羅漢彫りに適した固い石がないそうで、唐津方面から取り寄せているとのことである。

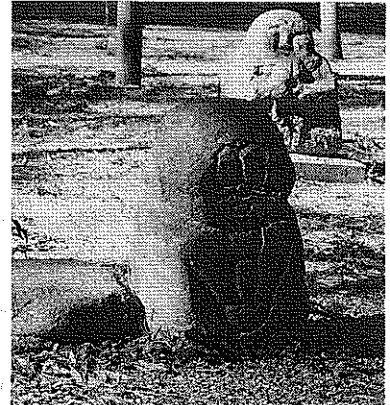
平成羅漢は、旧羅漢さんがある隣の竹林を造成し、「羅漢の里」として整備しており、ここに鎮座している。まだ敷地の広さに比べ、羅漢さんの数が少なく、羅漢群としての迫力は乏しいものの、周辺の竹林の間から射す日差しを浴び、のどかな雰囲気を漂わせている。

●アンパンマンやドラえもん羅漢もある

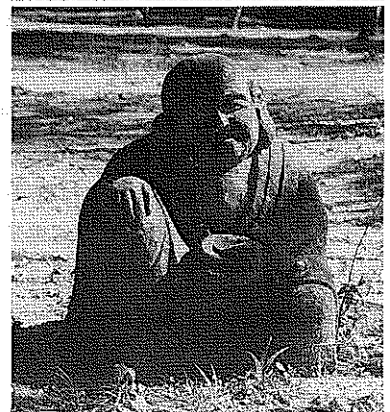
現在、参加者は20人程度であり、この中には小城中学校の美術部の生徒が美術顧問の先生の熱心な指導により、最近毎年参加している。中学生は今までの仏さんにこだわらず、アンパンマンやドラえもんなどキャラクターものも作っているようで、実際に見てみると、どうもこれまでの羅漢さんのイメージとかけ離れており、いささか不釣り合いのような感じがしないでもない。

また、黄檗宗（京都の万福寺を本山とする禅宗の一派）では普茶料理なる精進料理があって、これを復活しているグループ「普茶の会」（会員約10名程度）も

高校生が彫ったドラえもん羅漢



笑顔がやさしい羅漢さん産



あり、ふるさと祭りでは60名程度の普茶料理を用意するそうである。祭り以外の時では観光協会を通して予約すれば提供していただけるとのことであるので、興味のある方は是非観光協会までご連絡していただきたい。

●町外の人にも口コミで広がることに期待。

観光課長さんの話によると、年々制作希望者が減ってきているのが気になりとのことであった。しかし、昨年の祭りでは隣の町で若い女性3人の申し込みがあったとのこと、これから口コミで町外に広がり羅漢づくりに興味を持ち、参加する人たちが増えてくることが期待される。年間10～15体程度ずつ増えていけばよいとのことであるので、大きなPRをして受け入れの準備に苦勞するより、気長に取り組み、後20～30年度に五百羅漢になることが、この平成羅漢の里づくりに似合っているように感じた。

（山田 龍雄）

イギリス旧産炭地振興のその後とその他

～2回目のグラウンドワークトラスト視察

昨年、11月の終わり頃にイギリスのグラウンドワークトラスト（以下GWT）を初めて視察したが、今年（97年）も同じ時期に再び訪れることとなった（前回の視察についてはよかネットNo25に掲載）。それに先立って、当日の現地案内もお願いしたイギリスGWTのジャパンダイレクター小山善彦氏が、地元福岡で行ったNPOセミナーでのGWTに関する講演も含めて紹介したい。

●グラウンドワークトラストは地域づくりの仲介役

GWTについてはこれまでも何度か説明してきたが、簡単に言うと、住民と企業と行政の間に立って、3者とパートナーシップをとりながら地域づくりを進めようとする組織である。イギリスでは、行政の財政難から国策の一環としてGWTが作られている。つまり、行政だけでは大したことができなかったため、市民にいろいろ任せようとした。しかしイギリスは市民の行政不信が根強く、3者が協力するのは難しかったので、GWTという仲介役をおいた、ということのようである。

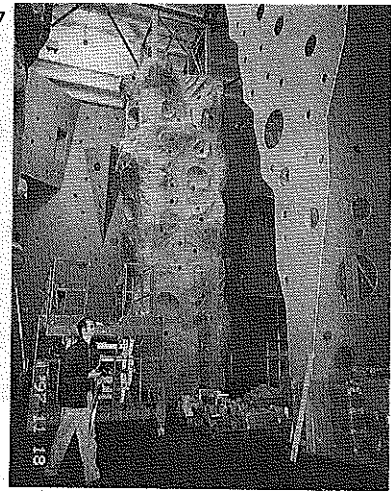
社会が安定せず行政不信が強いということは、市民が「何とかしなければ」という意識を生み、また民主主義意識も強い中でイギリスのボランタリーセクターは発達してきた、と小山氏は説明していた。逆に、日本は社会が安定し、与えられた民主主義の中で、市民は何をしたらいいかわからない、ということも言えるようだ。

GWTは地域づくりの中で主に環境に関する部分、つまり環境改善、環境教育、レクリエーションの場の提供を担当している。環境を改善するだけでは地域はよくなるので、行政などと連携して、雇用の創出など地域を総合的に考えながら、GWTとしては環境部分を受け持っている。

訪れたのはウェールズの旧産炭地で、州都カーディフにも近いマーサー&カノンGWTとカフェリエリンGWT。マーサー&カノンGWTは昨年に引き続き2度目（福岡県GWT研究会代表の大谷氏に至っては4度目）、カフェリエリンGWTは初めてである。

マーサー&カノンGWTでは地元行政とジョイントベンチャーを組んで地域の改善に当たっている。補助金

張り合わせのロッククライミング施設



などは行政から取ってくるが、足りない分を企業などからかき集めるのにGWTが重要な役割を果たす。

●地形を活かさないでロッククライミング？

企業が来ない地域で経済活動をするために住民が作った「ディベロップメントトラスト」という組織ができていた地域があった。チャリティ団体と企業の合体したようなもので、収益事業を行って雇用を創出していくが、税制の優遇措置もある。GWTはこことも提携して地域改善に取り組んでいる。

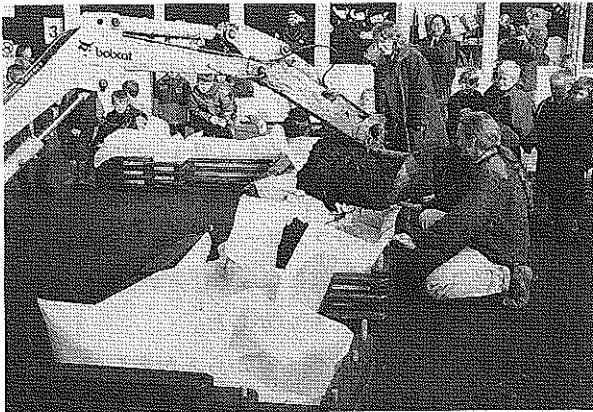
場所は炭鉱跡の谷沿いの地域だが、昨年来たときは2haの敷地の中で、改修中の建物を事務所にして、その横に地形を活かしたロッククライミングの施設を作り、ツーリズムの客を集める、という話だった。今年行ってみると、完成間近の大きな建物が新しく隣に建っていて、中はロッククライミングのパネルを張った、地形とは関係のない、おもちゃのようなレジャー施設だった。

ツーリズムの発達したイギリスとはいえ、こんなものに人が来るのか、かなり疑問がわく。建設中の現在は、事業費6億円が開発基金や行政の補助などから出てスタッフ20人を雇っているが、開園予定の2000年以降は自主運営になる。雇用創出も建設中だけじゃないかなあ、と思うと日本のレジャー開発とだぶって見える。GWTはマネジメントも一緒に考えているとは思っているのだが、住民が作る会社だけに後が心配だ。

●簡単に組み立てられる花壇材料を開発

もうひとつ、マーサー&カノンGWTの隣の地域にあるカフェリエリンGWTを訪れた。ここはマーサー&カノンGWTより規模が小さく、プロジェクトも比較的小さなものを多くやっている。

組立簡単、形は自在の「リンクキット」で花壇づくり



工場団地の改善のような大きなプロジェクトでも、小さな公園づくりのようなプロジェクトでも、意義は同じだ。というのがGWTの考え方である。

このGWTで開発したものに、リンクキットという簡易組立型花壇製作材とでも言うべきものがある。2×4や2×6の廃材（と思う）を20cmや50cmなどの規格に切り、両端に穴をあけ軸を通して組み立てられる様にしている。ベンチとしての利用も可能である。形、高さ、色も自由で、場所も選ばない。訪ねた小学校では、アスファルトの上にリンクキットとシートで冬用の花壇を作っていたが、春には取り除くかも知れないと言っていた。

また、障害者用施設横の公園づくりでは、弱視の子供たちのために、色使いのはっきりした花壇やオブジェと、見えなくても匂いがわかるようにハーブを中心とした花壇づくりを行っていた。

他にも見せてもらった公園づくりは、子供たちの作品をオブジェとして取り入れるなど工夫がみられるが、一方では水路が汚かったり、芝生の上に枯れ葉が一杯だったりして、地域と一緒にやっているといいながら地域住民の管理意識は低いように思われた。

さて、翻って福岡県GWT研究会であるが、今後どういう組織としてやっていくかを現在検討中である。NPOとするのか、財団化を目指すのか、イベント推進型で行くのか、地域の政策提案まで突っ込むのか、何でも手広くやるのか、テーマをしぼるのか、はたまた役員会は組織するのか、会費は取るのか、名称はどうする、などなど。

この報告は次回以降としたい。 (伊藤 聡)

才田地区炭住改良事業完成！

～町内会長さんの喜びの声に感激

昨年の11月16日に才田地区改良住宅の完成を祝して町内会主催の竣工パーティがあり、私も基本構想から実施計画までお手伝いをした関係で招待を受けていたので喜んで参加させていただいた。

パーティには町長、助役以下関係者が招かれ、私が到着した時には町内会の人々が準備であわただしく動き回っていた。パーティでは漆生獅子舞、餅投げ、最後はカラオケ大会もあり、賑やかな会であった。

●テーマは地区内幹線道路と排水改良を兼ねた総合的な住環境整備

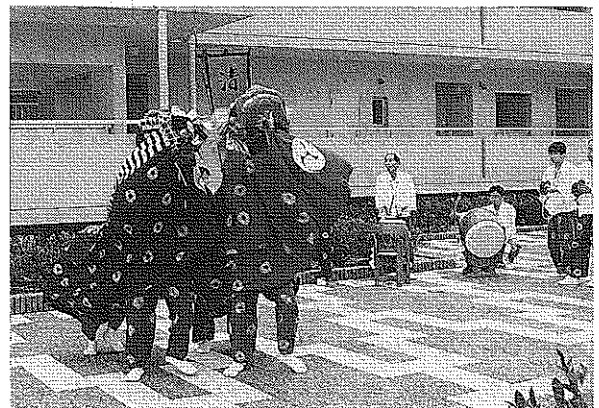
当事業は平成6年に基本構想を立て、約4年の歳月をかけ完成したものである。町内会長さんの事業に対する情熱と関係者の努力もあり、事業としては極めてスムーズにいったと考えられる。

改良前の事業対象地区の中央部には窪地があり、常時排水が悪く、悪臭を漂わせていたところであった。また、地区内を通る幹線道路は町内を東西につなぐバイパス道路の性格があったため、トラックなどの交通量が多い地区であるにもかかわらず、S字カーブの道路となっていたことから交通上問題の道路となっていた。従って、この改良事業では単に改良住宅の建設のみではなく、幹線道路の線形変更と改良、及び窪地部分の埋め立てによる環境改善を含めた地区全体の総合的な住環境改善を行うことが目的であった。

●町内会長さんの喜びの声が励みになる。

現在、既に23世帯の方が改良住宅に入居されているが、パーティの席で町内会長さんに感想をを聞くと「こ

団地の広場内で催された漆生の獅子舞





改良した地区内幹線道路沿いに建つ改良住宅

事業の概要と経過

《経 過》
 平成 6 年 8 月：基本構想立案、事業計画申請
 平成 6 年～7 年：買収除却、実施設計
 平成 7 年 5 月：開発申請届け
 9 月：造成事業着手
 平成 8 年 10 月：改良住宅建設
 《概 要》
 事業対象面積：1.4ha
 改良住宅戸数：23戸（2階建 22戸 平屋1戸）
 児童遊園：1,150㎡
 集 会 所：1箇所

の地区は近くに養鶏場もあり、悪臭が立ちこめていて環境が非常に悪いところであったが、この完成で見違えるようになった。」と感激の言葉をいただいた。

実施設計や開発申請の時点では、町とのやりとりや条件の変更などで、多々苦労した点もあったが、会長さんの喜びの声を聞くと、本当にこの事業に係わってこれたことについて素直に喜びを感じた次第である。

（山田 龍雄）

所 員 近 況

日本ロボットの性能低下

先頃、博多駅を歩いているとき、何か違和感を感じて、変だなと思いながら思い当たったことが、“ロボットの性能低下”である。その前にも、東京駅のコンコースを歩いている、同じ思いにとらわれたことがある。それは台北から帰ってすぐの頃であった。

昔大阪で仕事をしていた頃は、梅田の地下街を斜めに横切って歩いていた。そして「すげえ高性能だな」と思って、立ち止まって眺めたりしたことがある。どんな雑踏でも、まずぶつかるといことがない。

どのロボットも、当たる可能性のある相手には、テ

レパシーを発すると同時に、相手のそれに対応するセンサーを身につけていた。

ロボットの性能低下をなぜ感じたかについて、今から考えてみると、台北のロボットの動きより、東京のその動きがよくなかったからだと思う。福岡では、ラッシュアワーの地下街やコンコースなどをあまり歩かないので、まず東京駅のコンコースで感じたのだが、それ以来福岡の歩道でも、気になって仕方がない。先日、大阪のナンバでも、同じ思いがした。

歩道を歩いている時、向こうから人が来ると、近く前に「気」を発して、近くに来るまでお互いが気配を感じ合っていて、スムーズに行き違いができるのが普通である。ところが今頃の若い人は、際に来るまでなかなか気配を発しない。すぐ目の前で考えてしまうので、ウロウロしたり、当たったり、立ち止まったりすることになる。中高年の女性も同じような気がする。皆がナルシストになっているのではないか。

と、ここまで書いてきて、ひょっとするとこれは違っているかも知れないと考えた。つまり、私というロボットの性能が、落ちているということかも知れないのである。皆さん、どう思われるでしょう。

（糸乗 貞喜）

田舎の神社に出現した夜のサロン

～玉名市の熊野座神社の神楽

さる11月15日に（社）農漁村文化協会の高群さんのお招きで、熊本県の玉名市の神楽を見に行った。高群さんは「2農8サラの会」のメンバーで、畑のある玉名のご自宅から福岡まで毎日通勤されており、2農8サラをすでに行っている方である。そして、毎年、地元にある「熊野座神社」の神楽で、御自身が舞っておられる。

この神社は装飾古墳で知られる江田船山古墳からさほど遠くない場所にある。この日、辺りが暗くなった頃、山のふもとの神社まで、道ばたに点された赤い提灯を辿っていくと、闇の中にボワッと境内の光が見えてきて、なにか幻想的な雰囲気であった。

私が到着した時は、境内には舞い手・笛の吹き手・太鼓の伴者ら4人によって神楽が始められたばかりだった。夕御飯を済ませた集落の子供たちが、次々と集まってきて14～15人程になった。地元の人は「この田舎の集落にこんなに子供がおったのか」とうれしそう。集落の大人達も集まり、御神酒を片手に神楽を片目に世



幻想的な雰囲気で行われた夜神楽の舞

問話をしている。「お久しぶりです」という挨拶もあちこちでみられる。神楽によって田舎の夜のサロンが突如できたようである。

ふと舞台をみると高群さんが舞っている。刀をもって相方とやりとりする舞いで、その目は真剣である。

この日のクライマックスは夜の10時頃から始まる「鬼の舞い」。蠟燭の明かりの中で行われるその舞には、集まった見物客は目がくぎ付けになるという。

始めから終わりまで全部キチンと見なくても、見どころを見れば満足という感じなのだろう。ちなみに今回、私はこの「鬼の舞い」を見過ごしてしまい、非常に惜しいことをした。

今回、事務所の女性所員と一緒にいったが、タクシーの運転手、地元の方、と行く先々で新婚夫婦と間違われ、地元の方からはお酒で赤くなって「来年は御夫婦になって来ることを祈る」と乾杯までできてしまった。案外、こんな席でその気にさせられてしまって結婚までいく人が多いのでは、と思った。これも神楽のサロンとしての雰囲気なのだろうか。

ともあれ条件つきのお誘いを受けている。来年は「嫁さん」もしくは「嫁さん候補」くらいは連れて、約束を果たさねばと思っている。(尾崎 正利)

■若返り法発見

「人間なんて単純なもので……」などと言ったら、「人間なんて、などと大層なことをぬかすな。それはダメエだけのことだろう」とお叱りを受けそうだが、正に手前ミソの話を申し上げたい。

この11月に、大昔の同窓会をやった。私はド田舎の生まれで、国民学校1年生になったときは、1クラス全員で32人だったと思う(もちろん男女合わせて)。結局、戦時中に疎開してきた3~4人を除けば、中学卒業

まではほぼ同じ人数であった。途中で変わったことと言えば、中学の時に学校だけは隣村と合併して、ひとつの中学校ということになっただけである。ひとつのと言ったところで、今のようにバス通学があるどころか、自転車さえも1家に1台あるとは限らない時代のこと、何キロも離れた道を通学できるはずもなく、小学校時代と同じところに通学し、クラスも同じだった。

この商売に入って、自治体の「一部事務組合」というものを知ったとき、はじめて「あれは一部事務組合立中学校だったのか」と思った次第である。

ともあれ、数十年ぶりの顔を見ていると、〇〇ちゃん顔が浮かんできた。それが、小学5~6年、中学1年頃の顔である。

私たちの中卒時というのは、人生の方向が定まる年頃で、それなりに厳しい時期であった。つまり「親戚の伝」でか、「同郷の人の世話」になってかして大都市へ出ていく(就職する)か、一応高校に入るかということになっていた。高校に入るというのは1割程度だったのである。

「金の玉子」と言われ出すのは、もう少し後のことである。われわれは、田舎の「泥の玉」か、「山猿」のごときものだったかもしれない。

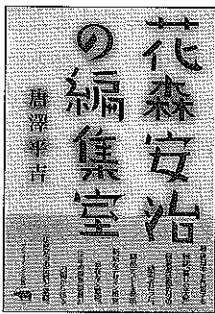
この11月にその12~13歳のガキが、約半数近く集まった。ホテルで一泊の同窓会である。どう考えても、あの朝鮮戦争末期の暗い雪空の中学卒業時と、今のホテルで1泊の同窓会というのがつながらない。

最初の同窓会は中卒の年か翌年の盆で、私の家の離れでやったように思う。もちろん酒は飲んだ。高校に行っている以外は自己責任で生きている連中であり、世間も家族も本人も全く違和感はなかった。やっぱり当時は、分かりやすい時代だったのである。

12~13歳に若返って顔を見合わせ、とりとめのない話に花が咲き、朝になったら淡々と別れた。豊かな気分であった。もちろん、今年亡くなった友や病気で参加できない友もいた。しかし、われわれは幸せな時代を生きて来たと思う。特に、あの朝鮮戦争時の先の見えない冬を知っているという貯金がある。不安は多かったが、不満は少なかった。今は不安は少なく、不満の多い社会のような気がする。

この同窓会は、毎年やろうということになっている。毎年、12~13歳に若返られるのである。

(糸乗 貞喜)



最も平凡で、最も常識的で、最も具体的な雑誌を創っていた、非凡でユニークな“人”の仕事場のはなし

—「花森安治の編集室」
晶文社刊、唐澤兵吉著—

職人という言葉が、だんだん少なくなってきている。以前は職人と言われた人たちが、先生＝師になり、侍・中堅役人＝士になり、偉い人＝家になってしまい、職人や芸人という言葉は片隅に追いやられつつある。

この本は、希代の職人編集屋に、弟子として6年間仕え、師匠の死後19年経って彫りだした、親分の風景である。

著者の唐澤は、入社面接試験で、編集長の花森安治と掛け合い漫才のような会話をし、志望理由とか専攻科目や卒論のことなど一切聞かずに終わってしまった。「それでいて内定の返事をもらったような、おかしな手応えを感じ」という話につけられた、面接問答の再現はなかなか面白い。それ以来、入社初日の編集長の挨拶で「1年間、なぜと訊かないでほしいということだ。ここでは朝から晩までなぜかを訊きたくることが山ほど出てくるはずだ。……なぜと疑問に思ったら、自分で考えて欲しい。1年もすればわかるだろう」と言われ、仕事の中で「ゼッタイニ、クチゴタエスルナ」と言われながら、「暮らしの手帖」の編集部にのめり込んでいった、著者の心情が伝わってくる。

花森安治は、昭和23年9月に「暮らしの手帳」を1万部からスタートさせ、昭和53年1月に倒れるまで30年間にわたって、現役の編集長でありつづけ、90万部にまで伸ばした人である。

今はどうなっているか知らないが、雑誌の新刊というものは、まず書店に置いてもらうだけでも大変である。「この雑誌を作りはじめたころは、新しい号が出るたびに」リュックにつめ、朝一番の汽車に乗り、各駅ごとに本屋をたずねて本を置いていただき、夜の9～10時頃に帰ってくるということが続いた。

広告を一切とらない自立の精神で90万部まで伸ばしたのである。

最後に私事でしめくくる。私も大卒後、3年半ほど編集屋であった。そして編集長に対して「なんだ職人じ

ゃないか」などと言ってふてくされていた。そして雑誌の創刊にも関与して、暮らしの手帖の何分の1かの思いはした。しかし、その仕事で仕入れたことが、今も役立っている。したがって、涙なしには読めないところが多々あった、心暖まる本である。

(糸乗 貞喜)

編集後記

平成7年度に我が事務所がコーディネートしてまとめたNIRA（総合研究開発機構）の助成研究「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」の中で、田舎での高齢者が安定した暮らしを営むための方法のひとつとして“様子見圏”（車で日帰りできる時間距離で、半日程度滞在をして面倒をみる圏域）なるものを提案した。今年の4月頃から、この様子見を私の最も近い関係者が実践することになり、週1回、車でまさに1時間半から2時間かけて田舎に帰り、掃除や食事の準備、通院などの面倒を見ている（兄弟3人で曜日を決めて様子見しているため、最低週に3日は誰かが田舎にいつている）。このためか高齢の親は比較的安定した暮らしをしているようである。これは我が身近で“高齢化”という現実とスピードを実感させられた体験であった。

本号に掲載している「ミニモノレール」の記事「高齢者のグループホームのセミナー」の中でのケア付き高齢者アパートの話は、どちらも地域のニーズをとらえた軽装備型のモノづくりである。今後とも地域のニーズに適応し、納得のいく値段の商品が求められるといえよう。（だ）

よかネット NO.31 1998-1

（編集・発行）

（株）九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130